

Title	意識・心の成り立ち
Author(s)	牟田, 隆郎
Citation	聖学院大学論叢, 23(1) : 169-180
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2246
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈研究ノート〉

意識・心の成り立ち

牟田隆郎

The Formation of Consciousness and the Mind

Takao MUTA

This thesis sets forth a hypothetical proposal regarding *apolia* in relation to the formation of consciousness and the mind, an issue that numerous scientists and philosophers have struggled with. A presupposition to such an investigation may be the premise that the structure and function of the neural circuits in the brain form a complex system. In said system, when individuals have various sensory perceptions, these may be simultaneously divided into two parts, viz., the I-system and the World-system. Furthermore, these two subsystems unite to form the mind, which is also composed of consciousness and unconsciousness.

There is a hypothesis that the forming of the conscious mind is based upon the reflexivity of the neurosystems in the brain, and it is assumed there is a process of the unconscious mind which, when heavily influenced by the emotional systems, produces consciousness with qualitative elements. The result is that the activities of the mind are being accomplished almost unconsciously, with only a small fraction of the totality being consciously grasped. The conscious self then subsequently appears within this consciously grasped element, with the conscious self then being able to produce a unique inner world.

As a result of above considerations, a major question inherently arises, namely, What is the manner of the individual self's existence?

Key words; Consciousness, Unconsciousness, Mind, Complex systems, Reflexivity, Self-reference
Key words; 意識, 無意識, 心, 複雑系, 再帰性, 自己言及

はじめに

この世界は何によって成り立っているのでしょうか。物質でしょうか。生命でしょうか。エネルギー

ギーであろうか。それともそれらを束ねる法則であろうか。

他にもいろいろと憶測は可能であろう。本当のところはよく分かっていないわけである。大勢の人が知恵を絞る、この世界の「如何にあるのか」という仕組みのあたりは、かなり明らかにされてきた。ところが「何故にあるのか」という問いには、答えはどうも見つかっていない。そして多分これからも見つからない。

心もとないはなしではある。私たちはなぜだか分からないまま、実際は謎に包まれた毎日を送っている。私が、皆が、この世界がなぜ存在しているのか知らないままに。

もっとも、このような思いを抱きつつ生活している人はきっと少ない。自分は今このように生きている。まわりの世間も、いつもと変わらない。世界があるのは自明のことである。自分にいつか死が訪れることも一応承知している。

もの心がつき、気がついた時には多くの人は、自分がいて、皆がいて、社会があって、その他もろもろのものを全てひっくるめて、世界があり宇宙があることを知っている。自分が生まれ生きていることを、今や当たり前のこととして受け入れている。一部の人を除いて、自分は自分であるということに、すっかり浸りきっている。

よくよく考えると、私たちは存在しつつも、まさにその存在の中心部分に、巨大な謎の空隙を抱え込んでしまっている。いわば何も知らされないままに、私たちはこの世界の中で生きてしまっている。気がついたら生きていた、というのが本当のところであろう。なぜこうなってしまっているのか……。

多分このような疑問は、かなりの人がどこかでちょっとは感じたことではないだろうか。このような問いは、難しい言い方をすれば、「存在が己れ自身の存在根拠を問うている」ということになるだろう。これは一種の自己回帰であり自己言及である。自己言及という営みには、延々と続いてゴールに辿りつけないようなところがある。メビウスの輪の上をグルグル回るようなものである。

それでも「存在が問う」というのは、ここでは「人間が問う」ということであろう。「人間が問う」というのは、「心が問う」ということであろう。「心が問う」というのは、つまり「意識が、あるいは意識で問う」ことであろう。

存在の謎はそう簡単に解明されないにしても、「意識」や「心」の謎ぐらいなら何とかならないか。古来数多くの哲学者や科学者の頭を悩ませてきた「意識」や「心」の問題ではあるが、この問うということをもたらず「意識」や「心」を攻略しないことには、先に進めない。無謀を承知だが、意識現象や心的現象の成り立ちについての仮説提示をしつつ、合わせて、「自分」というやはり厄介なものについても考察していこう。

意識とは

さてここでは、「意識」というものをかなり限定して捉えることとする。意識に関わる現象はかなり広般なものなので、ひとまず次のように考えよう。

深い眠りに陥っている時には意識はない。ただし夢を見ている時には、意識は部分的にはあれはたらいっている。失神している時には意識ははたらいしていない。(全身)麻酔が効いている時にも、意識はやはりはたらいしていない。

深酒をしたあと、その間の事情について記憶がない時はどうであろう。その際泥酔していたなら記憶(意識)がないのは分かるが、行動していた場合はどうなのか。多分事後の記憶想起が不可能なだけであって、その酔っている最中でも、何らかの意識は機能していたと考えられる。

これらの事態は、意識がないといういわば否定的状態の例示である。意識を能動的に定義づけようとする、「心」の諸現象や定義とも重なり、訳が分からなくなりやすい。かくして私たちが生きており、しかも先述したような「意識のない状態」以外には、意識がはたらいしていると捉えることとする。

覚醒の度合いが問題になるかもしれないが、それはあくまで「意識レベル」の問題であると考えよう。つまりは、私たちが目覚めて諸活動をしている時などに意識ははたらいしている。意識がない時には、主として身体の生命維持活動がはたらいしている。

すなわち繰り返しになるが、私たちが日常生活を送っている時には意識は立ち上がっており、先に挙げた特殊な状態の際には、意識ははたらいしていない。意識とはこれこれこういうものだという能動的説明は今の段階ではできないが、それはむしろこれからの作業で解明していくことである。

意識はどこにあるのか

ところで意識意識と言ってきたが、そも意識は人間にのみ現象しているものであろうか。それとも他の生き物にも、もしかして生命をもたない物体や構造物にも、意識は宿っているのであろうか。

この問題の難しさは、意識の定義にもよるが、意識そのものにある。いったい意識そのものを客観的対象として探求できるであろうか。否である。意識があるということの確かめは、直接にはできない。間接に推測するだけである。

早いのはしが、私たちが自分には意識があるということを証明するには、どうしたらいいのか。「はいここにあります・はたらいしています」というわけにはいかない。それでも自分にしてみれば、本当に本当に明瞭に意識がはたらいしている、と思える。「我思う、故に我あり」とはデカルトの有名な言葉であるが、「我思ったり感じたりする。故に我に意識あり」とでも言うのか。直接に捉えられ

ないだけに、意外と意識があるかないかを見定めるのは難しいのである。

自らに意識があるのは自らにとって自明だとしよう。それでは、まわりの他の人たちにも意識はあるのだろうか。他者にも意識があることを、私たちは普通はつゆほども疑いはしない。ところが他者にも意識があるかないかの判断は、結局他者の様子を見て推測するしかない。自分においてこうだから、きっと相手もそうであろう、ということである。つまり間接に慮るだけである。その相手が「自分には意識がある」と言ってくれても、本当のところは確かめようがない。

以上少々うるさく言ってきたが、同じ人間であれば、意識があるということを認めても構わないであろう。ほぼ同じ遺伝子配列を共有している人類であるから、きっと同じような体験をしているに違いない。何より互いに交わりをもてるからには、他者にも意識があるに違いない。

人間については意識はあるとしよう。では他の生き物についてはどうであろう。何らかのかたちで私たちとコミュニケーションがとれる生き物ならば、意識はあると言えそうな気もする。身勝手な理屈かもしれないが、お互いに何かを「共有」できているという感覚をもてるからには、どこか重なり合う「世界」を持ち合っているであろう。意識とは、認識世界獲得を可能にするはたらきのない「場や状態」という見方もできると思うが、どこかそれぞれの認識世界に重なりがあるとなれば、そこに意識がはたらいていると捉えてはどうであろうか。「認識」というのは、かなりレベルの高い対象把握と思われるので、認識世界と言うよりも、感覚世界あるいは感情世界と言ったほうが良いのかもしれないが。

あとはその生き物の観察される行動であるとか、人間のはたらきかけにどう対応するのかしないのかなどの様子を見て、類推するより他はないであろう。なお、哺乳類に関しては、人間との共通部分が他の種の生き物よりも多そうにだけに、何らかの意識をもっている可能性は高そうである。

それでは生命をもたない構造物であるとか組織についてはどうであろうか。意識がそこに宿っている可能性はあるのであろうか。大方の人は、そんなものには意識など存在しないと言うであろう。しかしそれはそれで、意識がないということの証明は難しそうだ。命あるものであれば、生物進化の過程で意識も獲得されてきたのではないかと考え、類推することもある程度はできる。しかし命のないものについては、その手は使えない。

思考実験をして、例えば超優秀な「人型ロボット」があるとする。会話もできるし、状況に応じた行動もとれる。そこに意識はないとどうして言えるのか。いやもしかして、そのロボットの中央演算部分に、何らかの意識が立ち上がっているかもしれないではないか。

生命があるかないかという観点ではなく、その構造なり組織なりというところに目を向けて、意識問題を考えていく必要もどうやら出てきたようだ。

意識の立ち上がり

生物界において、進化的に見てある程度上位にある生き物には、意識ないしその前駆的なものがあるということに、一応ここではしておこう。そこで次は、「機械」などにも意識は宿るのか、ということが問題になる。意識が立ち上がるには、いったいどのような構造的・組織的な条件が必要なのか、を突き止めねばならない。

はなしはやはり「脳」について触れないわけにはいかない。脳こそが人間の意識の中心的な座であるというのは、これは既に広く認められていることであろう。足の骨を折っても意識はあるが(あまりの痛さに失神すれば別であるが)、頭を強打すれば意識を失う。麻酔が効く本当のメカニズムは分からないらしいが、神経回路の情報伝達が通常のようにはたらかなくなっていることは確かであろう。麻酔が脳にはたらくと、速やかに意識は消失する。

大脳神経細胞どうしは、シナプスを介して、非常に複雑なネットワークを形成している。となると、複雑なネットワークがあることが、意識成立の条件であろうか。しかしすぐに気付くことだが、別に脳でなくても、複雑なネットワークは世の中にたくさん存在する。コンピューターに基づいたシステムがそうであるし、人間社会だってそうであるし、地球の生態系だってそう言えばそうである。さてさて、これら複雑なネットワークに意識は立ち上がっているのでしょうか。今のところそれらしいものを確かめた報告はない。

早くも意識の解明は、暗礁に乗り上げてしまった感がある。しかし、最近の脳科学の進歩は、私たち人間の意識成立について、ある程度のヒントは与えてくれる。行けるとこまで行ってみよう。

まず言えることは、大脳の神経ネットワークは、実に実に複雑に形成されていることである。一方で機能に特化した部分があり、他方では、お互いに使い回しができるような、重層化したシステムを作っている。そして、脳は電氣的・化学的に活性化しており、信号が伝わる過程で、それは増幅されもするし減衰されもする。しかもそれはひとつの「複雑系」をなしている。

さて、複雑系内に情報(信号)がとび交っていれば意識は立ち上がるのか。それだけではやはり無理であろう。少なくとも私たちの「人間の意識」は成立しない。

それでは人間の脳の神経システムに、何らかの特殊性があるのであろうか。こここのところは今のところ何とも分からない。しかしもしかしたらもちろん推測でしかないが、神経細胞と言うか各領野間(内)にある回帰的回路の存在に、何か大事なポイントがあるかもしれない。

外界の情報処理は、単純な直線的なものではなく、情報回帰がどうやら頻繁になされているようだ。つまり、情報→認識 という一方向的な流れではなく、情報がグルグル回りをしている過程があるようである。それがもしかしたら、脳のかなりの部分を巻き込んで、いわば共振的に起きているとしたら、そこに何か意識発生の芽がなくはないか。信号が非常に複雑に絡み合っていく中

で、意識が立ち上がるというわけである。あるいは再帰的なシステムにおいて、ひとつの自己言及的なはたらきとして、意識が生まれるのではないとも言える。

しかしこれは、少々単純すぎるはなしかもしれない。回帰的な回路が縦横に張りめぐらされていれば、そこに意識が生まれるとすれば、人工的に複雑な回路を巡らせれば良いだけのはなしである。

もちろん、神経細胞と言うかシナプスのもつ可塑性を人工的に再現しなくてはならないだろうが、それを克服したとしても、すっきり意識が出現するかどうかは分からない。従って、再帰的な機構をもった複雑系であるということは、多分、意識が立ち上がる上での必要条件に留まると思われる。

私システムと世界システム

ここで私たちが諸感覚を通して、どのように外界像を作り上げるのか、そのことに触れておきたい。周知のように、私たちはいろいろな感覚を通して、まわりの外界の様子を掴んでいる。通俗的に5感と言われているものを通してということであるが、もちろん5感以外の感覚もはたらいている。それらの感覚で得られた情報を、脳内で統合しかつ再構成することによって、私たちはまわりの様子を把握している。

そこにおいて構成されたいわば「世界」は、その通りに私たちのまわりに展開しているわけではない。それは大げさに言えば、脳が「作り上げた」世界である。私たちは決して客観世界なるものを認知しているわけではない。

私たちに備わっている諸感覚器官と外界事象との相互関係の結果を、さらに脳がそれらを束ねて加工して創り出したのが「世界」である。外部情報を、電磁波や物理的機械的力や化学的刺激などの別個のモードで受けとめ、それらを脳が再構成した結果が「世界」である。

さてこの創り出された世界を、今度はいったい「誰」がそうと認識しているのであろうか。認識する主体は何なのか。それはもちろん「自分という主体」であると人は言うであろう（「自分」とは意識的に把握されている自らを指す）。それではその「自分」は、脳の中のどこに居るのか。これは「ホムンクルス問題」と言われているものである。脳内に小人の主体がいて、入力し映し出された様子を眺め理解していると考えられるものである。

しかし脳内をいくら探しても、「小さな自分」などいないのは明らかである。「自分」が「世界」を認識するということが、いったいどのようにして成り立っているのであろうか。

「自分」という主体が一方に既にあり、他方に「世界」という客体が既にあると、前者の「自分」が後者の「世界」を対象化するという構図は間違っている。「自分」が徐々に立ち上がると同時に、「世界」が徐々に立ち上がっていく。

もう少し正確に言うと、たくさんの情報なり経験なりが脳内で片や「私システム」に収斂し、片や「世界システム」へと収斂する（システムと言う場合は、意識化できない部分を含む）。感覚する

とは「分ける」ことである。つまり、「私システム」と「世界システム」がそこから分かれ始める。そしてまた、「私システム」と「世界システム」を合わせたものが「心」ということになる。従って、全ては「心」の中にあるとも言える。

「私システム」はやがて身体像をも吸収し、ひとまず身体をもって自らの中心拠点とする。ただ「私システム」の範囲は、身体を境界とすることに留まらずに、もっと外側の「世界システム」の側にまで食い込んで形成されることも多い（パーソナル・スペース）。

また「世界システム」の方はと言うと、身体境界の外側にもっぱら設定される。稀にこれが身体境界の内に侵入してしまうことがある。すると心的危機はかなりのものとなる。

さてこうしたシステムにおいて、言語が大事な役割を果たすことになる（人間の場合）。例えば「私」という主格が設定される。すると「私」を主語として、様々な事柄が私との関係をもとに秩序づけられる。さらには事物と事物、事柄と事柄などなどの諸関係が、やはり言語によって秩序づけられる。言語自体が秩序を有しているからである。

言語を用いることにより事象の分節化が進み、また関係づけや階層化が進展する。それはまた、言語を介して「世界」をそして「自分」をも眺め把持することにも繋がってくる。

ここで「記憶」というものはたらきを無視してはならない。私たちが日々経験することの多くは、「記憶」回路にまわされる。そして忘却される事象がたくさんあるにしても、残りの経験は、最終的には長期にわたって大脳全体に分散収納される。もちろんそれは信号の系路というかたちで。

この記憶というはたらきがあることによって、「私システム」と「世界システム」とが安定して持続する。と同時に、次々となされる経験、次々と出遭う事象が、既に構築されている「私システム」や「世界システム」に照合され仕分けられる。時には、それらの新情報が、既存の「私システム」や「世界システム」に改変をもたらす。

内的独自世界

諸感覚からの情報や記憶情報ももとになり、人生初期には、「私システム」と「世界システム」の基礎がまず出来上る。そこではいずれ言語も重要なはたらきを担うようになる。また情動系からの情報も、実はこれらのシステム作りに参加している。情動系は外界認知の基礎系を形作るものであり、私システムや世界システム作動の際の基調となっている。

さて「私システム」がかなり活性化（発達）してくると、そこに独自の能力が出現してくる。それは「イメージ」想起力と「思考」力とである。このどちらもがメタ認知的特徴をもっており、従ってやはりここにも再帰的な過程がはたらいている。この両者は、それぞれ単独で機能することもあれば、組み合わせあって機能することも多い。

ここで重要なことは、「私システム」において内的独自世界を立ち上げる準備が、これで整ったと

いうことである。イメージや思考によって、改めて新たな「自分」や「世界」を創出するだけの自由度を獲得したのである。

例えばイメージの場合、外界の状況に関わりなく、恣意的に脳裡にいろいろ浮かべることができる。それは実際に感覚している時と同じようなかたちをとる。その際ほぼ同じ脳の回路がはたらいているのであろう。このように、「あたかも」実際に感覚しているかの如くそれをなすことができるのがイメージである。

他方「思考」というのは、言語にその基礎を置いている。従って思考する力がつくのは、言語の発達を俟ってからと言うことになる。合わせて、論理的な操作を行ったり、抽象的に物事を把握したりする力も段々ついてくる。展開の質は異なるが、思考はイメージ単独よりも遥かにその作る世界は広い。あるいは深い。それは主に言語のもつ融通無碍さから来ると言えるだろう。

この思考のもついわば有能さが、人類の生存にプラスにはたらいてきたことは確かであろう。しかし、思考力を得たことが、プラスの結果のみを導いたかは疑問である。私たちが抱える人類特有の苦悩も、この思考力があることからもたらされる。このことについてはあとで触れる。

さて思考力はそれだけでも十分に、リアルな内的恣意的世界を生み出すことができる。それは周囲に向かって楽観的な態度や行動をとることをもたらしたり、自身について、悲観的な捉え方を導いたりする。この反対ももちろんあるが、いずれにせよ、周囲や自らの「ありのまま」とかなりくい違った思惑を抱くことを可能にしてしまった。

このような内的独自世界は、他者や社会との繋がりを不断に保つ中で調整され続けなければならない。「ひとりよがり」は結果的にマイナスのものになりやすいからである。

若干否定的な見方に片寄ったかもしれない。いずれにせよこれらのことは、思考力のもつ二面性から来るものである。何事も「力」が強いと二面性をもちやすくなると思うが、思考力もその例にもれない。要は使い次第であろう。

さて、思考力の秀れたところはもちろんたくさんある。その中でも私が特に素晴らしいと思うのは、知的好奇心というものである。本論の「はじめに」で述べた、「存在が己れ自身の存在根拠を問うている」というのが究極のそれではないか。ここにも再帰性がはたらいているが、再帰性は、「存在する・ある」ということに本来的に備わっているのかもしれない。

ところで思考力の秀れた営みが覆えると、先に述べた人類特有の苦悩を招いてしまう。苦悩にもいろいろあるが、際立つのはやはり「絶望」であろう。絶望とは存在が袋小路に入り込み、迷いに迷った状態である。思考力がもたらす落とし穴からは、その同じ力を用いて脱出するのは難しい。他なるものとの繋がりの中に、脱出のヒントが恐らく隠されている。

思考力の肯定的な面は、個人単位でも鋭く追求され得るが、その否定的な面においては、他なる存在が重きをなすようである。これも人間のもつ「個」の部分と、「皆の中の一人」の部分という二面性からもたらされるようだ。

存在感・主体感・実在感

はなしを「意識」の成立過程に戻そう。再帰的な自己言及を可能にする複雑系をなす脳の神経回路があることが、まず意識成立の条件となる。もっとも「心」は「私システム」と「世界システム」を合わせたものであると同時に、「意識」だけではなく、「無意識」も含んでいる。

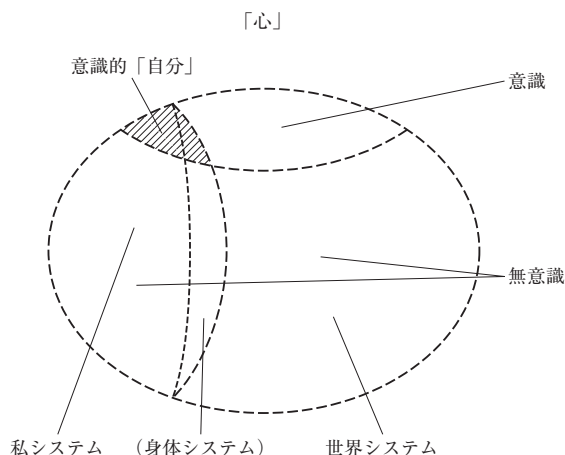
こうして「私システム」と「世界システム」を合わせたもの（心）を、いわば横断するかたちで「意識」と「無意識」がある（下図参照）。「無意識」についてはあとで述べることとして、ここでは、「意識」における存在感・主体感や実在感について考える。

さて「私システム」においては言語のはたらきなどもあり、「自分」感覚が主体感を準備し、意識体験をめりはりのあるものにする。「自分」があるという感覚をもつことと同時に、「自分」以外の客体（世界）があるという感覚も強まる。その時、対象の「実在感」も高まって感じられると思われる。

「実在感」という言葉を今使った。私たちが普段「生き生き」と諸事象を感じとっているということは、意識現象における本質的な大事な面である。そこでこの実在感あるいは存在感などについて考えてみよう。

私たちは通常、自分は「今・ここにいる」という存在感と、自分は自分であるという「主体感」を抱きつつ、まわりの事物に対して「実在感」を感じとっている。これら存在感・主体感そして対象の実在感があることが、恐らく意識の立ち上がり感覚をより鮮明なものにしている。

それではこれら存在感・主体感や実在感はどこからやって来るのだろうか。単に自分が「いる」から、事物が「ある」から、で説明がつくであろうか。「いる」とか「ある」ということは、そう簡



単には説明がつかない。「いる」とか「ある」は、先に述べたように「心」の領域において、「私システム」と「世界システム」が同時並行的に成立した際に、結果的に伴ってくる感覚である。

それは結果的なものであって、私たちが知りたいのは、「自分」や「世界」を把握しているまさにその瞬間に伴っている存在感・主体感や実在感である。鍵は、「私システム」と「世界システム」に区分けされるその時の、脳内の共同歩調的な作動にあるのではないか。

脳内に意識が普通に立ち上がっていれば、そこには、自分を含み込んだ何らかの事物・事象の表象なり反映なり、あるいは思考の流れなりが存在している。その表象や反映や思考が出来上るにあたっては、諸感覚からの情報、それらと記憶との照合情報、運動系からの運動要素、「私システム」独自のイメージや思考要素、そして情動系からの感情要素などが統合されている。もちろんその過程は、ほとんど無意識的なものである。

ここでまず情動系というものはたらしに注目しなければならない。そもそも何で脳に情動系が備わっているのであろうか。先に、情動系は外界認知の基礎系をなすということを書いたが、情動系はいったい何の役に立っているのであろうか。

もともと情動系は、古くから生物の脳に備わっていた。何の役に立っているかなどと言うのは、ちょっと失礼なはなしかもしれない。情動系こそが、生物がまわりの状況を判断する際の中心的な役割を担っていた。

人間においては、脳の前頭前野が高度な判断の中心となっているようだが、その判断の背景で情動系がいわば色づけをしている。多分、何かを個別に判断する場合だけではなく、多くの脳活動に情動系は関与している。

この情動系をはじめとして、後述する無意識過程の存在が、意識内容物に対して存在感・主体感や実在感を付与しているのではないか。TVカメラなど機械類が行なう一種クールな画像形成ではなく、人間の認知は、所与の像や思考に情動系などの無意識過程の味付けがなされている。それが存在感・主体感なり実在感ではないかと思うのである。

再帰的・自己言及的な回路を抱え込んだ複雑系としての脳において、無意識の後ろ盾により、意識に存在感・主体感・実在感が付与される。そしてその時、「今ここに生きている」という感覚が生まれる。

心と無意識

これまで述べてきたことは、どちらかという、「意識」を中心とした事柄であった。ところが「心」というものは先述したように、「意識」と「無意識」を合わせたものである。実は無意識の存在に関しては、識者の間でもいろいろと議論があった。しかし人間の脳のはたらき方がある程度分かってきたところ、どうやら意識にのぼらずに機能している部分が、かなりの割合を占めていることが判

明してきた。

無意識的にはたらいっている部分の方が、意識的にはたらいっている部分よりも多いようなのだ。いや心のはたらきのほとんどが、無意識的に遂行されている。そしてその一部を意識化していると言ったほうが正解かもしれない。意識化されたものの影響力が相対的に大きいことも確かにある。しかしそれも私たちが何事も意識において、最終的に実感することが多いということからきているのであろう。

自分がこうしようと「思った」その瞬間よりも前に、既に脳が起動しているという実験報告がある。恐らくこうした現象は、この実験だけに留まらず、ほとんどの人間の心的活動に伴っていることと思われる。無意識過程がいわば「主体」とも言えるのである。

しかしそれは、私たちが無意識の「奴隷」であることを意味はしない。今まで「私」ではなく「私システム」という言い方をしてきた。実は主体は意識・無意識を含む「私システム」である。そこにおいて様々な意志や思いや衝動などが生じ、結果その一部に意識の光が当てられ、それらが「意識的自分」のものとなる。

さてこのように「私システム」は、無意識にまで広がっているわけだが、無意識過程は、「気分」というものによって意識に反映される。結構人はこの気分というものによって、よくわけも分からないままに行動や言動をなしているのではないだろうか。ただしこれらのことの一定程度は、当然意識化することが可能である。カウンセリングなどの試みも、この「気分」的な部分の、言語化を伴った意識化が中心である。

なお蛇足になるが、カウンセリングなどの「心」の調整も、他者のそれとの共振的な営みを介して実現されることが肝心である。なぜならば、「心」の望ましい状態というのは、ひとりそれだけで成就されるものではないからである。一人一人の心の安寧は、他者やまわりの世界との調和あってこそのものである。

「この私」という特別なあり方

以上、意識の成り立ちとそのリアルさの起源について。心は意識と無意識を含むものであること。そして私システムと世界システムが、心の場において同時並行的に出来上ってくる。私システムには内的独自の部分が成長し、特に自己言及的に「自分」像を恣意的に作りがちになること。などなどについて述べてきた。合わせてこれらの過程やシステムにおいて、「再帰的」なものが色濃くはたらいっていることも強調した。

また意識の場において、無意識過程の「地」的な効果により、意識の内容に存在感、主体感、実在感がそこに伴うこと。そのため「まさに今生きている」というビビッドなリアルな体験がそこに生まれることなども述べた。情動系をはじめ無意識過程がそこに深く関与しているというのは、

あくまで私の抱いた仮説である。私システムや世界システムのはなしなども同じである。

結局のところ、本論の『はじめに』で述べた「世界は如何にあるのか」の一端を、ここでも考察してきたことになる。「何故にあるのか」の課題は、ほとんど手つかずのまま残った。しかし、「意識」「無意識」「心」「自分」というものに関わる、ある本命課題が浮き彫りになった。これはもちろん「何故にあるのか」の側にある課題である。

それは、意識・無意識であれ心であれ世界であれ何であれ、「この私」が存在しないことには、何も無いに等しいということである。一般的にというかたちで「人」とは「世界」とは……といくらでも探究可能である。その「一般性」を越え突き抜けたところに「この私」という特別なあり方が存在する。

全ては「この私」を中心に展開する、と言うか展開せざるを得ない。世界と言っても、「この私」のいる「ここ」を中心に広がっている。類い稀な思考力を授かったおかげで、客観的・普遍的態度をもって事象を捉えることを人はしてきた。しかしそのほとんどは、まさに「この私」を除外し無視しつつなし遂げてきたものである。

肝心要の（私が考える）本命課題に蓋をして、どこか安心してはいないのか。これ程明白な巨大な謎に、どうして多くの人は気付かないのか。いや知らぬふりをしているのか。この神秘的であり奇跡的な出来事になぜ驚かないのか……。いやいや、またメビウスの輪の上をグルグル回ってしまったようだ。

冷静に考えてみれば、「存在が己れ自身の存在根拠を問」い、そして答えを得ることは、そこに超越的視点をもっていなければ当然無理である。そして存在の内側にすっぽりくるみ込まれている人間が、真に超越的視点をもつことは不可能である……いくら無理であろうが、やはり問わねばならないのが存在の性なのか。再帰性・自己言及性の畏は罪深いものである。いや面白くてやめられないものである。